

## Erzähl mir keine Geschichten !

—— ジャック・デリダによる『存在と時間』読解 ——

西山達也

ひとは、どのようなときに、問いを上手く立てることができたり、あるいはぎこちない仕方でも問いを発してしまったりするのだろうか。ひとはなぜ、問いそれ自体を前にして困惑し、解決や決着ばかりを求めてしまうことがあるのだろうか。なぜ突然、どこからともなく問いが湧きあがり、その問いから離れられなくなることがあるのだろうか。問いを発すること、問いを立てることとは、いかなる身ぶりなのだろうか。

ハイデガーは『存在と時間』序論第二節において、「問い」の形式的構造の分析から出発して、自らの著作を貫く主導的な、そして唯一の問いである存在の問い／存在の意味の問いを立ち上げる。あるいはそうすることによって、問いそのものが立ち上がり、自己展開するための道筋を描き出そうとする。しかしながらその問いは、存在の意味である時間性という目標に十分な仕方で到達することなく、「息切れ」<sup>(1)</sup>してしまう。こうしたハイデガーによる問いの道筋の提示と「息切れ」は、しかしながら多様な思考の展開可能性を発現させる。ジャック・デリダによる1964年から65年にかけての講義『ハイデガー 存在の問いと歴史』（以下においては『ハイデガー』講義と略記する）は、その可能性を示す哲学史上のドキュメントの一つである。この講義においてデリダは、『存在と時間』というテキストのいくつかの要所を重点的に解釈することで、その読解可能性を拡張しようとするのだが、その際に起点となるのが、同書の序論第二節（「存在への問いの形式的構造」）の精密な読解である。

本稿は、デリダが1960年代後半以後に独自のハイデガー読解を提示するのに先立つ時期において、この序論第二節のいかなる箇所に着目し、「存在の問い」を発展的に継承するにあたってどのようなテキスト上の操作を遂行しているのかを検証することで、デリダによるハイデガー読解の射程と意義を明らかにしたい。

### 1. 問いという構造

まず、「問いの構造」がどのようなものとして提示されているのかを確認するところから始めよう。ハイデガーは、『存在と時間』序論第二節の冒頭において、「存在の意味への問い」を単に「ひとつの基礎的な問い」ではなく、「基礎的な問いそのもの」と見なすところから開始している[SZ 5]<sup>(2)</sup>。そのうえで、「存在の問い」の基礎的な構造を形式化すべく、まずは「問う」という

行為一般の構造諸契機を際立たせる。それらは相互に関連しながら、《分節化された問いの構造》を形成する諸契機である。

当該の節において、問うということは、まず、「求めること [das Suchen]」の一種であることが確認される。そして「求めること」と、その相関項としての「求められているもの」とのあいだに、前者が後者によって導かれるという循環性が見られることが指摘される。「求めること」の基本構造に則って、領域諸学問は、その領域に属する存在者（求められているもの）に対して、特殊理論的な探求、すなわち科学的「調査探究 [das Untersuchen]」を遂行する。

こうした「求めること」のモデルに即して、問いの構造諸契機が明らかにされる。第一に「問う」という行為には「問われているもの [das Gefragte]」が相関項（志向的相関項）としてそなわっているとされる。第二に、この「問われているもの」には「問い求められているもの [das Erfragte]」が伴うとされる。「問い求められているもの」という構造契機は「問われているもの」という構造契機とは本質的に異なったものである。「問い求められているもの」は、「何かにむけての問い」において目指されている＝志向されているものであり、それは、「問いかけられているもの」が位置づけられるところの特定の「眼差し」[Hinsicht, cf. GA 17, 73-75]、あるいは問いにおいて「到達されるべきもの」、問いが「獲得しなければならないもの」である [GA 20, 194]。

そもそもなぜ問いに構造がそなわっていないなければならないのだろうか。この問いに対しては、ハイデガーは差し当たって答えを与えていない。問いが「立てられる [gestellt]」べきものである以上、そこには構造がなければならないということが、当然の前提とされているかのようである。たとえばひとが何かに関して「漠然と疑問を抱いている」というとき、まだ明示的には問いが「立てられて」いないようにみえる。しかし知的好奇心に駆られるなどして物事を知りたいと強く欲したり、あるいは疑問を整理する必要性から問いを明確化せざるをえなくなるとき、それまで非主題的に立てられていた問いが、主題的に立てられた状態になる。問いが主題的に立てられた状態とは、問いが構造化された状態と言い換えることもできるだろう。それは何らかの主体が問いを明確に設定することではない。「明示的に問いを立てること [explizite Fragestellung]」とは、「問うことが問いそのものの構成的諸性格すべてにおいてあらかじめ見通されている」ようになることである [SZ 5]。「見通しがきく [durchsichtig]」とは、何らかの構造体を貫いて [durch] 事象があらわになることを言う。したがって、明示的に立てられた問いにおいては、問いを通じて、問いの構造そのものが明らかになる——この構造化は学問的探究という制度の発生の端緒でもある。問いが構造化し、その構造が明らかになることが、まさしく、問いが「立てられる」という事態の意味するところなのである。

以上のように析出された形式的構造を「存在の問い」に適用するとき、問いかけられるもの＝存在者、問われているもの＝存在、問い求められているもの＝存在の意味、という対応関係がす

## Erzähl mir keine Geschichten !

ぐさま導き出される。そのうえで、ハイデガーは、この問いにおいて出発点となる「問いかけられるもの」が、どのような存在者であるのかを問いかける。存在の問いにおいては、いかなる任意の存在者をも出発点として設定することができるわけではない。第二節の議論の後半部を占めるのは、いかなる「問いかけられるもの」が、問いかけられるのに相応しい存在者として選ばるべきであるかをめぐる議論である。その存在者は、問い求められるもの＝存在の意味を、ある種の仕方ですでに知っている存在者である。この存在者においては、存在するということがの意味が、非概念的な仕方ではあるが「前了解」されているのである。存在の意味を前了解しているがゆえに、この存在者は、存在の問いにおいて「優位」を保持している存在者である。これこそが「現存在」と呼ばれる存在者である。なぜ現存在という存在者が優位を保持するのかといえば、それは、この存在者が、同時に、「問う者であるわれわれがそのつどそれであるところの、まさにその存在者」、「問うという存在可能性をもった存在者」[SZ 7] だからである。ハイデガーはこの現存在を「範例的な存在者」と呼んでいる<sup>(3)</sup>。

## 2. 「いかなる物語も語らない」

このような「問いの構造」の解明の途上において、われわれは興味深い引用に遭遇する。それは、プラトンの対話篇『ソピステス』の一節からの引用なのだが、ハイデガーは次のような仕方ですその引用を行う。

存在問題の了解における哲学的な最初の歩みは、μῦθόν τινα διηγείσθαι しないこと、「いかなる物語も語らない [keine Geschichte erzählen]」ことに存する。すなわち、存在者を存在者として規定するにあたって、あたかも存在が何らかの可能な存在者の性格をもつかのように、その由来にある別の存在者へと遡らせることをしない、ということに存する。[SZ 6]

プラトンによって開始された哲学の最初の歩みとは「物語を語らない」ということであった<sup>(4)</sup>。そもそも『存在と時間』は、その「序言」において、存在の意味めぐって「途方に暮れる状態」[ἡπορήκαμεν 『ソピステス』 244a] を脱すべく、今日あらためて存在の意味への問いを立てる必要性を強調することから出発していた。この必要性を受けて、第二節では存在の問いを立てるにあたっての形式的構造が明らかにされるのだが、その途上で、ハイデガーは上記のプラトンの言葉を引用するのである。

「物語を語る」という言葉は、「エレアからの客人」が「伸るか反るかの議論 [παρακινδυνευτικός λόγος]」[242b] に取り組むべく、「差し当たっては明白なように思われている事柄を、よくしらべてみる」ことの一環として発せられている。「エレアからの客人」は、宇宙（万物）の根源を探究した先行者たちが、「存在」について語るさいに「子どもたちになにか物語 [μῦθος] めいた

ものを話しているように見えるのだ、あたかもわれわれが子どもであるかのように」[242c]と主張する。ハイデガーは、「エレアからの客人」が批判的に報告している「物語を語る」という行為について、これを「存在者の由来をたどって他の存在者へと遡ること」、そしてそのようにして「存在者を存在者として規定する」ことだと解釈する。

「エレアからの客人」は、このような「混乱した語り」である「ミュトス」を語らないと宣言しているのだが、これはミュトスからロゴスへの移行（脱神話化）による哲学の創設宣言として単純化してはならない。ハイデガーはここでの「ミュトス」を単に神話やおとぎ話といった意味では理解していない。それは存在者の由来を別の存在者へと遡らせて規定する説明方式である。そうした説明方式に依拠するかぎり、存在をめぐる巨人族の戦いが生じ、その帰結として、存在の意味がよくわからなくなり、「途方に暮れる状態」に行き着いてしまう。これに対しプラトンとアリストテレスは、先行者たちによる存在をめぐる混乱を批判し、存在論的な思索を展開したが、最終的には存在者の存在者性にまでしか到達しなかった。そのうえプラトンとアリストテレス以後に存在の問いが沈黙してしまったため、形而上学の歴史を通じて、結局のところ、存在者が存在者へと連れ戻される構造が維持されてしまった。したがって、問いを「反復する」ことが必要となったのである。しかしそれは同じ仕方で問いを立てることではなく、同じ問い（存在の問い）を違った仕方で立てることである。すなわち、存在者の存在者性を目指すのではなく、存在とその意味へと向かわねばならないのである。

（付言しておくならば、『存在と時間』に先立ついくつかの講義においてすでに、「物語を語る」ことについて論じられており、そのうえ、そのつど解釈のニュアンスが少しずつ異なっている。たとえば1926年夏学期講義『古代哲学の根本諸概念』によれば、「存在者についての物語を語った」のは、「神々の系譜」や「宇宙の創成」についての考察をおこなった人々——ヘシオドスやシュロスのペレキュデス——だとされる [GA 22, 35, 216]。これに対し、ピュシスについてのロゴスを明らかにしようとした「自然学者たち」は、自分たちが理解しないうちに存在者における存在を問うていた——つまり物語を語らないことを要請していた——のだという。1924/25年冬学期講義『プラトン『ソピステス』』では、エドゥアルト・ツェラーとエルヴィン・ローデを参照しつつ、『古代哲学』講義と類似した内容が述べられている。ただし、「物語を語る」という表現に関しては、「存在論的」な観点からみた古人たちの教説に関する「全般的性格づけ」であるとされている [GA 19, 440-441]。他方で、1919年の戦時緊急学期講義においては、プラトンにおける「物語を語る」ことの拒絶は、「それ以前のあらゆる哲学からのラディカルな方向転換」の自覚として解釈されている。これは、「真の学としての哲学の構築」の試みが歴史的地盤（自然学者たちからソフィストに至る歴史）のうえでのみ成し遂げられたことを意味する [GA 56/57, 19]。だとすれば、ハイデガーはここで「物語 [Geschichte]」を歴史的事実性の意味で理解しようとしていることになる。）

### 3. 読 解

こうした「問いの構造」の形式的な解明のただなかにおいて提示される「物語を語らない」という要請は、「存在の問い」の道筋において一体いかなる機能をはたすのだろうか。哲学の開始をしるしづける「存在の問い」の提起と、「物語を語らない」ことの要請とは、いかなる関係にあるのだろうか。たしかに、物語の不在は、『存在と時間』における現存在の存在探究の道行きにおいて決定的な意味をもつ。現存在がおのれの最も固有な存在可能性へと先駆するとき、その現存在に呼びかける「存在の呼び声」は、「世界で起きる様々な出来事についていかなる情報も与えず、物語るべきことを何ももたない」[SZ 273]。しかしながら、存在者から存在へ、そしてその意味である「時間性」へと向かう問いの構造の展開——この展開それ自体の時間性と語りの構造も問われなければならないだろう——のなかで、「物語」は単純に拒絶され、排除されてしまっているのだろうか。

ジャック・デリダは『ハイデガー』講義において、「問いの構造」の解明と「物語を語らない」ことの要請が必然的に連関しているということ、しかし同時に、「語り」<sup>(5)</sup>の可能性が還元不可能な仕方 で 存続すること、そしてこの存続を通じて存在の問いの練り上げと歴史性の思考が接合されていることを明らかにしている。本稿では、「問いの構造」と「物語を語らない」ことの連関を扱った講義前半部に絞って、デリダの読解がいかなる仕方 で 遂行されているのかを検証したい。

#### 3.1 assurance

『ハイデガー』講義の第二講において、デリダはまず、「物語を語る」ことに関して、これが「問われているもの=存在」と「問いかけられているもの=存在者」のあいだの差異——存在論的差異——の空間を立てふさぎ、存在の意味への道りを遮断する（「抑圧する」とも言っている）と解釈する。諸科学が存在者間の関係を因果性や法則性で規定するときにも、また、神学が存在者の全体を「最高存在 [者]」の創造によって説明するときにも、それらの説明が（かならずしも「物語」を語っていない場合でも）存在の意味の解明であると称するならば、これらは「物語を語る」という構造に陥っているのだという [H 62]。

これに対し、存在の問いは、自身に固有な存在論的な空間を切り開かなければならない。この空間に接近すべく、ハイデガーは「二つの確実になっていること [assurance]」を要求する。じつのところ、「確実になっていること」という表現に関して、デリダはこれをあまり適切ではないと述べ、留保を加えているが（「曖昧に、引用符で囲んで、適切でない語を用いるならば、「確実になっていること」」 [H 77]）、この語はそもそもハイデガー自身が用いている語である。すなわち、存在の問いにおいて「問いかけられているもの」が存在者であることを確認したのちに、

次のように述べられている。

存在の問いは、そこで問いかけられているものに関して、存在者へと接近する正しい様式が獲得されること、そしてそれが前もって確実にになっていること [Sicherung] を、要求するのである。[SZ 6]

ここでは、「存在の問い」が、「問いかけられるもの」である存在者へと接近するための様式が獲得されること、そして前もって確実にになっていることが求められている (die Gewinnung und vorherige Sicherung — 「前もって」は Sicherung のみを形容しているが、ここには「つねにすでに」という表現に見られるのと同様の、無時間性と時間性ないし時間的先行性の重ね合わせが見られる)。ちなみに、ハイデガーが Sicherung と呼び、デリダが assurance と翻訳している語には、「確実にするもの」、「保証」という意味も読み込むことができる。したがって、「確実にになっていること」と「確実にするもの」の双方の含意を精確に読み取りながらハイデガー／デリダの議論を理解しなければならないが、これを「保証」という側面からのみ考えるのは一面的である。すなわち存在の問いが範例的存在者へと接近するための何らかの存在者的な「保証」が必要とされているのだと読めてしまうからである。以上の理由から、ここでは assurance を「確実にになっていること」と翻訳する。

デリダによれば、「確実にになっていること」は二つの方向に分岐するという。それは、一方において、「存在の意味の前了解」という「事実」に関わる。問う者は存在の問いのなかで問い求められるものに対して、すなわち「存在」が言わんとしているもの」に対して、前了解をもっている。このことは、問いの構造が、言語一般の次元に定位していることを意味している。他方において、「確実にになっていること」は、問う者と問いかけられるものとの近接性に関わっている。この近接性は、問う者（現存在）と問いかけられるもの（現存在）とのあいだの、「発話のそれ自身に対する近さ」と関係している。そしてこの近さ——存在論的にみれば「遠さ」——が、「問いかけられるもの」である現存在の範例性を確実なものとする。

### 3.2 「読むわれわれ」

これら二つの「確実にになっていること」において示されるように、存在の問いは、語る存在者を通して立てられる。あるいは、語る存在者とは、存在の問いが、その存在者に向けて、その存在者を通して、その存在者によって、自らを立てるような、そうした存在者である [H 123]。存在の問いにおいて問いかけられているもの（存在者）は、適切な仕方でも問いかけられなければならない、われわれ (= 問う者たち) の問いかけられるものへの接近は適切でなければならない [H 125]。このような範例的な存在者について、ハイデガーは次のようにあらためて問うている。



## Erzähl mir keine Geschichten !

いかなる存在者において存在の意味が読み取られることになるのか。

An *welchem* Seienden soll der Sinn von Sein abgelesen werden ... [SZ 7 強調デリダ]

*Sur* quel étant le sens de l'être doit-il être lu ... [H 126]

※デリダは「おいて [sur]」をイタリック強調しているが、引用した原文では「いかなる [welchem]」が強調されている。すぐあとに同じ文を再び引用しているが、その際には「おいて」と「読み取られる」という語をイタリック強調している。

この問いかけを、デリダは文字通りに受け取る。すなわち、現存在はそこにおいて意味を「読み取られる」ことになるもの、いわばテキストのようなものなのだ、というのである。デリダは1968年の講演「人間の目的=終焉」においても、「読むわれわれ [nous lisant]」という定式によって、現存在をテキストとして理解するという方向性を明確に表現している<sup>(6)</sup>。このテキストの比喩を、デリダは、偶然出現した表現としてではなく、決定的な隠喩と見なす——「ハイデガーはテキストの隠喩を決然と引き受けている」[H 127]。「問いかけられているもの」である様々な存在者のなかから、「良いテキスト」ないしは「特権的なテキスト」として規定されるべき範例的存在者が選び取られ [H 126]、それ以外存在者は「外典 [apocryphe]」とされる。外典は遠ざけることによって隠すクリプトであるのに対し、現存在は「隠しはするものの」「読まれるべく与える意味を (...) われわれに近づけるような仕方です」テキスト、すなわち「良いクリプト」であるという。まさにこのクリプトを開く [décrypter : 解読する] 行為が、固有の意味での解釈と呼ばれる行為である。存在論としての現象学は、それが現存在を主題とするかぎりにおいて、解釈 [Auslegung] を方法論的意味としてもつ [H 128]。また、「現存在の現象学のロゴスは ἐρμηνεύειν [解釈する] という性格をそなえている」[SZ 37]。通常の意味で「解釈学」と呼ばれるものは、この固有の意味での解釈から派生したものである。そしてこの固有の意味での解釈学 [Hermeneutik] (現存在の歴史性を読まれるべきもの、思考されるべきものとして与える解釈学) によってこそ、現存在の歴史性は、歴史学という意味での歴史 [Historie] の可能性の条件となるのである。正確に言えば、ここでは存在の問いと現存在の歴史性が直接に結びついているわけではなく、両者のあいだには、存在の意味としての「時間性」が介在することになる。デリダは講義の後半において、時間性と歴史性、そして歴史学という意味での歴史とのあいだの連関をめぐる迷宮へと入り込むことになる。

以上により、『ハイデガー』講義の前半(第一講から第四講まで)における読解戦略の概要が、ある程度は明確化したのではないと思われる。すなわち、デリダは、ハイデガーの「問いの構造」を精査することを通じて、「問いの構造」のただなかにおいて排除された「物語を語ること」の可能性の条件であるところの「歴史性」の契機を、「問いの構造」そのもののなかへと連れ戻すことを試みているのである。それこそが「存在の問い《と》歴史」という講義のサブタイトル

の意味するところなのである（本稿では扱うことができないが、「存在の問い」と「歴史」のあいだの連関を生じさせる決定的な契機として、『ハイデガー』講義において、「隠喩」の作用が終始一貫して強調されていることも明記しておかなければならない——これについてはすでに多くの論者が指摘している通りである。本稿の主題である「物語を語ること」、すなわち存在者の由来を別の存在者へと遡らせて規定することは、デリダによって「存在者的隠喩」と言い換えられている。したがって、存在の思考は「隠喩なきもの」の地平を告げ知らせるものであるとされる。その一方で、歴史性とはいえば、隠喩性として自己隠蔽的に自らを開示する——とはいえ、それゆえにまた、歴史性＝隠喩性と短絡的に理解してはならない [H 323]。以上の議論の構成を概観するかぎりでは、デリダの読解において隠喩概念が、操作概念として、中心的な役割を担っているようにみえるが、同時に、この講義において隠喩概念が十分に仕上げられていないようにみえるのも事実である。ハイデガーが『根拠律』において掲げた「隠喩的なものは形而上学的なもの内部にとどまる」[GA 10, 72] というテーゼに対して、どのような距離がとられているのかは明確ではない。ここでの隠喩概念の使用がどれほど戦略的に企図されたものであるのか、また、1960年代のデリダの思考において隠喩概念が決定的な重要性をもっているとしたら、それがどのような来歴をもつものなのかについては、現時点では検証材料が出揃っておらず、謎に満ちたままとどまっている）。

## 4. 翻 訳

しかしながら、以上の要約的な解説だけでは、デリダによるハイデガー読解の内実の半分までしか理解することができていないように思われる。もう半分を理解するためには、デリダが実際にこの講義でおこなっている翻訳と註解の操作を検証することが必要となるのではないだろうか。

じつをいえば『ハイデガー』講義は、同時期のデリダの数々の論考や著作のテキストと比べると、平易で読みやすいように見えるが、そうした外見に惑わされてはならない。実際、そこではハイデガーや他の哲学者たちのテキストからの数多くなされているのだが、そのせいでかえって、それらの引用を通じてデリダが何をしようとしているのかが見通しにくくなっている。しかしながら、デリダによるハイデガーのテキストの翻訳そのものを注意深く読むならば、翻訳と註解を通じての変容ともいえるべき操作がおこなわれていることを垣間見ることができるのである。

以下において、デリダによる翻訳を通じての註解の特徴がよく表れている三箇所を、デリダが参照しているアルフォンス・ド・ヴァーレンスとルドルフ・ベームによるフランス語訳<sup>(7)</sup>[BW訳と略記]と比較対照したうえで検討したい。

### 4.1 第一の箇所

[1] Als Suchen bedarf das Fragen einer vorgängigen Leitung vom Gesuchten her. [2] Der



## Erzähl mir keine Geschichten !

Sinn von Sein muß uns daher schon in gewisser Weise verfügbar sein. [3] Angedeutet wurde: wir bewegen uns immer schon in einem Seinsverständnis. [4] Aus ihm heraus erwächst die ausdrückliche Frage nach dem Sinn von Sein und die Tendenz zu dessen Begriff. [5] Wir *wissen* nicht, was »Sein« besagt. [6] Aber schon wenn wir fragen: »was *ist* ›Sein‹?« halten wir uns in einem Verständnis des »ist«, ohne daß wir begrifflich fixieren könnten, was das »ist« bedeutet. [7] Wir kennen nicht einmal den Horizont, aus dem her wir den Sinn fassen und fixieren sollten.

[1] 求めることとしての問うことは、求められているものからの先行的な導きを必要とする。  
[2] したがって、存在の意味は、すでに何らかの仕方において、われわれにとって用意されていなければならない。  
[3] われわれがつねにすでに何らかの存在了解のうちで動いているということは、さきに示唆しておいた。  
[4] その存在了解から、存在の意味への明示的な問いと、存在の概念へとむかう傾向とが生い育つのである。  
[5] 「存在」とは何を意味するのかを、われわれは知らない。  
[6] しかし、「『存在』とは何であるのか」と問うとき、われわれはこの「である」が何を意味しているのかを概念的に確定できないままに、すでに、この「である」に関する何らかの了解のうちを身をおいている。  
[7] われわれは、そこから発して「である」の意味を把握し確定させことのできる地平すら、分かっていないのである。[SZ 5]

### デリダによる翻訳

[1] En tant qu'acte de chercher, le questionner a besoin d'être préalablement orienté par le cherché, par ce qui est cherché. [2] Le sens de l'être doit donc nous être *déjà* d'une certaine manière disponible [compréhensible ?...]. [3] Nous l'avons annoncé : nous nous mouvons *toujours déjà* dans une entente de l'être [phrase disloquée par les traducteurs]. [4] C'est d'elle que naît la question expresse [explicite] du sens de l'être et le mouvement vers son concept. [5] Nous ne *savons* pas [*wissen* souligné] ce que « être » veut dire (*was Sein besagt*). [6] Mais déjà quand nous demandons [et non « dès que nous demandons »] : « *was ist "Sein"?* » : « qu'est-ce que *c'est* [souligné] l'être ? », nous nous tenons dans une certaine entente [compréhension, *Verständnis* ...] de ce « est », sans pouvoir fixer dans un concept ce que « est » signifie (*ohne daß wir begrifflich fixieren könnten, was das « ist » bedeutet*). [7] Nous ne connaissons même pas l'horizon à partir duquel nous devrions saisir et fixer ce sens. [H 79]

### BW 訳

[1] En tant que recherche, une question doit être orientée préalablement par son objet. [2]

Le sens de l'être devra donc nous être déjà accessible en quelque manière. [3] Nous avons dit que nous nous mouvons toujours au sein d'une compréhension de l'être déjà présente. [4] C'est d'elle que surgit la question explicite du sens de l'être, comme encore la recherche du concept dont l'être sera pourvu. [5] Nous ne savons pas ce que « être » veut dire. [6] Mais dès que nous demandons « ce que l'être est », nous nous trouvons déjà dans une certaine compréhension du « est », sans pour autant pouvoir fixer conceptuellement ce que cet « est » signifie. [7] Nous ne connaissons même pas l'horizon dans lequel nous aurons à saisir et à fixer ce sens.

第一文では、ドイツ語の *das Suchen* が BW 訳では *recherche* [探究・研究] と訳されているのに対し、デリダの翻訳では *acte de chercher* [探し求める行為] と訳されている。そして、*das Fragen* は BW 訳では *une question*、デリダ訳では *le questionner* である。さらに *das Gesuchte* [求められているもの] は BW 訳では *objet* [対象]、デリダ訳では *le cherché, ce qui est cherché* [求められているもの] となっている。BW 訳は平易な語彙を用いることで読みやすさを優先しており、ハイデガー哲学になじみのない読者にも抵抗の少ない翻訳となることを目指している。これはフランスにおけるハイデガー受容の初期以来の傾向に合致していると言えよう。これに対し、デリダの訳は教育的であり、平易さをある程度まで犠牲にすることで翻訳の精度——学術的な正確さ——を高めようとしている。とはいえ極端に難解な訳文というわけではない。

第二文においては、原文で強調されていない *déjà* [すでに] という語が、デリダの翻訳ではイタリック強調されている。また、*verfügbar* が BW 訳では *accessible* [近づきやすい] と訳されているが、デリダは *disponible* [用意されている] もしくは *compréhensible* [理解可能である] という二つの訳語を提示している。ハイデガーは「存在の意味」が「われわれにとって」*verfügbar* である [用意されている] と述べているが、これは、デリダにとっては、「近づきやすい」ことを意味するわけではないようである。このことは「われわれ」と「近さ」の関係がデリダにとって決定的な争点となっていることを示唆している。

第三文では、BW 訳とデリダの訳のあいだに大きな相違がみられる。デリダは「われわれが存在了解のうちをつねにすでに動いているということを、告げておいた」と翻訳しているが、BW 訳では、「われわれがすでに現前している存在理解のなかを動いているということを、述べておいた」と訳されている。ハイデガーの *immer schon* という表現が BW 訳では「すでに現前している」と翻訳されており（デリダが警戒するであろうような「現前性」の意味ではなく、「そこにある」といった意味で *présent* という語が用いられているように思われるが）、これについてデリダは、「翻訳者たちが文をばらばらにしている」と書き添えている。ちなみに原文

ではイタリック強調されていない「つねにすでに」を、デリダはイタリック強調している。「つねにすでに」は、デリダによれば、「フランス語的ではなく」、「フランス語の哲学的な統辞法に衝撃を与える」表現であり、アプリアリなものを歴史性の次元に翻訳した語である [H 77]。

第四文では、ドイツ語の Tendenz が BW 訳では recherche、デリダ訳では mouvement と訳されている。BW 訳はある種のテキストの読みを提示している可能性があるが、引用箇所冒頭の das Suchen の訳と同じ訳語が用いられることで混乱が生じている。

第五文では、wissen [知る] というドイツ語が強調されていることが括弧内で指摘されている。デリダはハイデガーによるイタリック強調や括弧の使用には細心の注意を払って翻訳・註釈しているのだが、ここでは存在了解の知にかかわる不在（「知らない」）——存在了解の「クリプト」的性格——が問題になっているため、デリダはとりわけこのイタリック強調に着目するよう促している。

第六文では、schon wenn wir fragen を、デリダは「われわれが (…) と問うときにすでに」と翻訳し、BW は「われわれが (…) と問うやいなや」と翻訳している。デリダは「われわれが問うやいなや」ではない」と括弧内に書き加えている。schon wenn を dès que と翻訳することはかならずしも誤訳とは言えないが、déjà quand と翻訳することで「すでに」の表現する先行性と事実性を強調しようとする解釈の方向性は一貫している。また Verständnis [了解] を、デリダは compréhension ではなく entente と翻訳しており、entendre [(声を) 聞き取り理解する] の含意に注意を向けようとしている。第六文では、このほかに、sich halten が BW では se trouver [見いだされる]、デリダ訳では se tenir [身をおく] と翻訳されているという違いがある。se trouver も se tenir もフランス語としての意味合いにほとんど差異はないように見えるが、デリダが用いている動詞 tenir は tenue [姿勢・態度・保持] や maintenant [今] といった派生名詞との連関を有しており、ハイデガーが第二節で言及している「問うことの構成的な諸態度 [Verhaltungen]」[SZ 7] という表現およびその時間性との意味論的なつながりを想起させることができる。

#### 4.2 第二の箇所

Der erste philosophische Schritt im Verständnis des Seinsproblems besteht darin, nicht μῦθόν τινα διηγεῖσθαι »keine Geschichte erzählen«, d. h. Seiendes als Seiendes nicht durch Rückführung auf ein anderes Seiendes in seiner Herkunft zu bestimmen, gleich als hätte Sein den Charakter eines möglichen Seienden. Sein als das Gefragte fordert daher eine eigene Aufweisungsart, die sich von der Entdeckung des Seienden wesentlich unterscheidet.

存在問題の了解における哲学的な最初の歩みは、μῦθόν τινα διηγεῖσθαι しないこと、「いかな

る物語も語らない」ことに存する。すなわち、存在者を存在者として規定するにあたって、あたかも存在が何らかの可能な存在者の性格をもつかのように、その由来にある別の存在者へと遡らせることをしない、ということに存する。[SZ 6]

#### デリダによる翻訳

*Le premier pas philosophique dans la compréhension du problème de l'être consiste à [au présent et non au passé comme traduisent les traducteurs – « la philosophie a fait son premier pas lorsque » : Heidegger ne se réfère pas ici à Platon comme un fait passé mais pour indiquer la nécessité d'un geste menaçant toujours hier, maintenant et demain, la question de l'être] consiste à ne pas *muthon tina diègeisthai*, à *keine Geschichte erzählen*, c'est-à-dire à ne pas déterminer l'étant comme étant dans la provenance [l'origine de l'étant comme étant] par le recours à un autre étant, comme si l'être avait le caractère d'un étant possible. [H 63-64]*

#### BW 訳

La philosophie a fait son premier pas dans la compréhension du problème de l'être lorsqu'on a renoncé à *μῦθόν τινα διηγείσθαι*, à « raconter des histoires », c'est-à-dire lorsqu'on a renoncé à déterminer l'origine de l'étant comme étant par le recours à un autre étant, comme si l'être avait le caractère d'un étant possible.

BW が、「哲学が存在問題を了解するさいに第一歩を踏み出したのは、『物語を語る』ことを断念したときだった」と複合過去の時制を用いて翻訳しているのに対し、デリダは、「存在問題の了解における哲学的な第一歩は、「物語を語ら」ないことにある」と現在時制で翻訳している。原文は過去時制では書かれていない。デリダも括弧内で注記しているように、ハイデガーがここでプラトンを参照しているのは、過去の事実を参照するためではなく、「存在の問いを脅かす身ぶり」が、過去にも現在にも未来にも生じるということを指摘するためなのである。「物語を語る」というこの不穏な [menaçant] 身ぶりは、けっしてプラトンにおいて悪魔祓いされたわけではない。それは哲学史のなかで、つねに、反復的に回帰するのである。そしてこの身ぶりを取り除くという身ぶりもまた、哲学の歴史を通じて必然的に回帰することになる（「存在の問いを立てるにあたって物語を解任するというハイデガーの身ぶりを際立たせるとともに、その身ぶりの特異性と困難さを際立たせるに先立って、この身ぶりが古典的なものであることをまずは確認しなければならない」[H 58]）。歴史という事実的な位相において、時間を貫通する真理の時間性が繰り返し顕現する。それが、「昨日も、今も、明日も」の意味するところである。このような事

実性の位相において作用するプラクシスを「身ぶり」という語でデリダは言い表している。

#### 4.3 第三の箇所

Der λόγος der Phänomenologie des Daseins hat den Charakter des ἐρμηνεύειν, durch das dem zum Dasein selbst gehörigen Seinsverständnis der eigentliche Sinn von Sein und die Grundstrukturen seines eigenen Seins *kundgegeben* werden.

現存在の現象学の λόγος は、ἐρμηνεύειν [解釈する] という性格をそなえているのであって、これによって、現存在自身に属している存在了解に対し、存在の本来の意味と、現存在に固有な存在の諸根本構造とが告知される。[SZ 37]

##### デリダによる翻訳

Le *logos* de la phénoménologie dans l'être-là a le caractère d'un *hermèneuein* par lequel *est annoncé (kundgegeben)* à la compréhension de l'être qui appartenait au *Dasein* lui-même le sens propre de l'être et les structures fondamentales de son être. [H 128]

##### BW 訳

Le λόγος de la phénoménologie de l'être-là a le caractère d'un ἐρμηνεύειν qui annonce à la compréhension de l'être, incluse dans l'être-là, le sens authentique de l'être en général et les structures fondamentales de son propre être.

この箇所に関しては微細ではあるが徴候的な修正がなされている。BW は「現存在に内包されている存在了解」と翻訳しているが、デリダは「現存在それ自身に属していた [appartenait] 存在了解」と、半過去の時制で翻訳している。ドイツ語の原語は *gehörig* であり、これはかならずしも過去の時制に関連づけて理解しなければならない語ではない。にもかかわらず、この箇所を半過去形で翻訳しなければならない理由について、デリダ自身は註釈を加えていないのだが、それは、現存在にとって存在了解が非現前的で「クリプティック」——存在の意味を差し当たっては知らずにいる——であることに由来しているように思われる。第一の箇所でも「われわれがつねにすでに何らかの存在了解のうちで動いている」と述べられていたが、この「つねにすでに」の時制を強調するために、デリダはここで（意図的にそうしているのかどうか最終的に判断がつかないが）半過去の時制を用いて *gehörig* を翻訳し、現在化しないものとしての存在了解を現存在に帰属させているのである。

ここまでを確認したように、デリダが提示している翻訳はいずれもきわめて教育的な翻訳であ

るのだが、それでいながら、ハイデガーをニュートラルな立場から翻訳・註釈しようと試みているのではない。むしろ翻訳の作業を通じて、ハイデガーのテキストにおいて徴候的に現れている「つねにすでに」の根源的な時間性（まさしく「物語を語る」ことの断念が反復的に回帰する時間性）を露顕させ、それを思考させようとする傾向は一貫している。こうした操作にもとづいてテキストの読解可能性を拡張しようとする企ては、1960年代半ばにデリダが試行錯誤しつつ確立しようとしていた読解手法（のちに「脱構築的」と形容されることになる手法）のプロトタイプであったことは改めて指摘するまでもないだろう。ハイデガーは、「存在の問い」を反復しつつ形而上学の語彙を翻訳しなおす作業を「思考する翻訳 [denkende Übersetzung]」と称したが、デリダは、こう言ってよければ「反復=取戻し [Wiederholung]」を「物語 [ré-cit]」と翻訳しつつ<sup>(8)</sup>、「翻訳」と不可分なものとして「思考」を提示した哲学者であったと言えるだろう。

\*

最後に、「問いの構造」のなかに「物語」を再導入することの意義に立ち戻っておきたい。ハイデガーにとって、「存在の問い」の立ち上げは「物語を語る」ことの途絶のうえに生起する出来事であった。これに対して、デリダが想定したように、存在の問いが立ち上がる瞬間に物語と歴史の可能性が再導入されるならば、問いが生起する場としての現存在の範例的で特権的な地位そのものが、あるいは問うことの営みそのものの範例性が、問いに付されるのではないだろうか。ハイデガー自身も後期の思索においては、現存在の「範例性」に関して一定の留保を加えているが、それでもなお、問うことが思考の本来的な可能性であるとの確信には変化がないように思われる（「問うことは思考の敬虔さである」[GA 7, 36]）。デリダはといえば、『ハイデガー』講義の結語において次のように述べている。

もしかすると覚えておられるかもしれないが、わたしが正当化しようと試みなかった語がひとつある。それは問いという語であった。[H 326]

これは、「問いの構造」そのものを問いに付すことが講義の隠された中心課題であった（中心課題となる可能性があった）ことを暗示している文としても読むことができるだろう。しかしながら、問いの構造そのものを問いに付すことは不可能である、あるいはそのようなことは不適切であると、デリダは反論するであろう。なぜなら、「問いに付す」と言った瞬間に、すぐさま問う者の範例的な地位がふたたび確保されてしまうからである。したがって、問いが発せられる手前で、問いを立てることの決断がなされる手前で、問いから遁れ去るものを掬い取ることが肝要なのではないだろうか。それは問いを放棄することは意味しない。むしろそれは、問いが立てられることによって立ちあがるいかなる制度にも、またいかなる存在（実存）にも収斂することのな



## Erzähl mir keine Geschichten !

い仕方では拡散する何か、それでいて問われるべくわれわれに來訪する何か（これこそが存在の意味であろう）を、思考しつづけることなのではないだろうか。

### 注

- (1) Jacques Derrida, *Heidegger. La question de l'Être et l'Histoire. Cours de l'ENS-Ulm 1964-1965*, Galilée, 2013, p. 229. 以下、本書からの引用のページ数は、「H 頁数」と略記する。
- (2) 本稿におけるハイデガーの著作や講義録の参照指示は、『存在と時間』に関しては Niemeyer 版のページ数を「SZ 頁数」と略記し、それ以外の文献に関しては、Klostermann 版全集の巻数・頁数を「GA 巻数, 頁数」と略記する。
- (3) ハイデガーは、現存在の「範例性」をめぐる自己自身の主張に関して、後年の欄外注記において、「誤解をまねきやすい」と留保を示し、現存在は「そのものとしての存在を手渡し [zu-spielen]、その傍らで戯れる [bei-spielen]」という意味で「例 [Beispiel]」なのであると補足している。
- (4) 「物語を語らない」という身ぶりは、その後の哲学において幾度となく反復される。たとえばフッサールは、『イデーン I』の第一章第一節の最初の註において、「ここでは物語を語っているわけではない [Es werden hier keine Geschichten erzählt]」という表現を用いて、まったく同じ拒絶を表明している (Edmund Husserl, *Ideen zur reinen Phänomenologie und phänomenologische Philosophie. Erstes Buch. Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*, Husserliana, Bd. III-1, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1976, S. 7)。ハイデガーが『イデーン』のこの箇所から示唆をえて、『存在と時間』において「物語を語る」ことの放棄を宣言しているのか否かは定かではない。いずれにせよ、このフッサールの表現にはデリダも『ハイデガー』講義において着目している [H 75]。
- (5) この「語り」の可能性について、デリダは *αἴνος* というギリシア語（物語・寓話・諺・称讃・決定ないしその宣告・権威ある語り、等を意味する語で、「謎」を意味する *αἴνigma* と語源を共にしている）を用いて説明を試みている [H 257]。初期デリダの「アイノスとしての歴史」をめぐる構想については、亀井大輔氏の著書『デリダ 歴史の思考』（法政大学出版局、2019年）および亀井氏の著書に対する書評を参照されたい（『実存思想論集』第35号、2020年、199-201頁）。
- (6) Derrida, *Marges – de la philosophie*, Minuit, 1972, pp. 149-150.
- (7) Heidegger, *L'Être et le temps*, traduit de l'allemand et annoté par Rudolf Boehm et Alphonse de Waelhens, Gallimard 1964.
- (8) 「存在者について物語りつつ報告すること」[SZ 39] とは異質な「運動」としての物語をめぐるのは、デリダも読んでいると思われる以下のテキストを参照されたい。Maurice Blanchot, *Le livre à venir*, Gallimard, 1959, p. 13. ここでブランショはプラトン『ゴルギアス』から、ソクラテスが「最後の審判」の物語を語る箇所 [523a] を引用している。« Ecoute un beau récit [λόγος]. Toi, tu penseras que c'est une fable [μῦθος], mais selon moi c'est un récit [λόγος]. Je te dirai [λέγειν] comme une vérité [ὄς ἀληθῆ ὄντα] ce que je vais te dire [λέγειν]. » [では聞きたまえ、美しき物語を。君はそれをお話と考えるかもしれない、と思うのだが、しかし僕としてはロゴスのつもりでいるのだ。というのは、これから君に話そうとしているのは真なることとして話すつもりだからね。(加来彰俊訳)]